

英語における動詞の意味上の複合性

飯 田 満 良

本稿では Ann Borkin: “Two notes on *want* and *desire*” を紹介し、その問題点について論じたい。

want という動詞は *want* と多くの意味特性を共有する動詞、たとえば、*desire* など、と少なくとも二つの点で異なる。一つは次の例に見られる。

(1) a. I don't want you to lift a finger to help Bill.

b.*I don't desire that you lift a finger to help Bill.

すなわち、(1a) では *not* は補文から主文に上昇 (raising) されている。G. Lakoff (1970) は *want* と違って *desire* は否定語上昇変形 (Negative Raising) を許さないので容認不可能であると主張した((1b))。

もう一つの点は Lawler (1971) の観察に関するものである。彼は (2a) は ‘Mary wants to bomb Hanoi personally’ か ‘Mary wants her government to do the bombing’ かに解釈されるのに対して、(2b) は ‘Mary wants to bomb Hanoi personally’ にしか解釈されないということを指摘している。

(2) a. Mary wants to bomb Hanoi.

b. Mary longs to bomb Hanoi.

さらに、彼は次のことを指摘している：*want* が (2b) の *long* のように行動する *desire*, *crave*, *yearn* のような動詞とどのように意味が異なるか規定するのは困難であるばかりでなく、たとえ意味の相違を明らかにすることができるとしても *want* と *desire* などの動詞の行動の相違を意味の相違とすることはあまり見込みがないように思われる。確かに *want* と *desire* などの動詞の相違を記述するのは困難であるけれども、意味上の相違が、*want* は否定語

上昇変形を許すということ、(2a) と (2b) に見られる相違があることにかかわっているように思われる。

want, long, desire, crave, yearn などの動詞はすべて強意語 (intensifier) をとる。

- (3) Max's mother badly wants to act on the stage.
- (4) Gladys longs terribly to own a Rolls.
- (5) Sam passionately desires Sadie's strong arms around him.
- (6) My aunt is a shut-in and craves company terribly.
- (7) Professor Mills sorely yearns to be head of the department.

しかしながら、desire, crave, lust after, hunger for, be itching, be dyingは、これらのパラフレーズが 'want+強意語 (boosting intensifier)' を含みうるという点で want より意味上複雑であるように思われる。たとえば、yearn は 'want badly', crave は 'want badly enough to almost need', be dying は 'want to extremely badly and with impatient anticipation' にパラフレーズできる。desire のような動詞に強意語がつくと、それらは desire の意味にある強意要素を誇張することにより、冗長的修飾語として機能するようである。be dying や be itching は強意の意味が強いので、これらにおいては強意副詞を伴うとおかしな文になる。たとえば、(8), (9) はいずれもおかしい。

(8) ?Gladys is itching terribly to own a Rolls.

(9) ?Professor Mills is sorely dying to be head of the department.

want の強意の意味を含む動詞、たとえば、desire などは否定語上昇変形を許さない。同様に、want が表面構造で強意語に修飾されていると否定語上昇変形は許されない。つまり、否定語は強意語の前 (表面構造で) に上昇されてはならない。

- (10) a. Max's mother desperately wants not to act on the stage.
- b. Max's mother wants desperately not to act on the stage.
- c. Max's mother desperately doesn't want to act on the stage.

d. Max's mother doesn't want desperately to act on the stage.

e. Max's mother doesn't desperately want to act on the stage.

(10a), (10b) は否定語上昇変形が適用されていない。(10a), (10b) は want に対する強意語の位置だけが異なっている。(10c) では否定語は want と desperately の間に上昇され、(10c) の意味は (10a), (10b) に非常に近い。しかしながら、(10d), (10e) は否定語上昇変形が適用された文として解釈できない。(10d), (10e) は 'it is not true that Max's mother wants to act on the stage' か 'Max's mother wants to act on the stage, but not desperately' に解釈される。すなわち、(10d), (10e) は 'Max's mother wants not to do something' と解釈される (10a), (10b), (10c) と同義ではない。(11) の文は (10) の文と平行的である。

(11) a. Maisie $\left\{ \begin{array}{l} \text{longs} \\ \text{yearns} \\ \text{desires} \\ \text{is dying} \end{array} \right\}$ not to be the butt of any more of
Dave's sadistic jokes.

b. Maisie $\left\{ \begin{array}{l} \text{doesn't long} \\ \text{doesn't yearn} \\ \text{doesn't desire} \\ \text{isn't dying} \end{array} \right\}$ to be the butt of any more of
Dave's sadistic jokes.

(11b) の文では否定語は主動詞の前に生じており、すべて 'want+強意語' の意味を共有している。すなわち、(11b) のすべての文は 'it is not true that Maisie wants to be the butt of Dave's jokes' か 'Maisie may somewhat, but not very badly, want to be the butt of Dave's jokes' を意味するが、否定語が補文にある (11a) のどの文とも同義ではない。要するに、否定語上昇変形に関して、表面構造における 'want+強意語' 複合体 (たとえば、(10)) は基底構造における 'want+強意語' 複合体を含んでいる動詞、たとえば、desire, yearn と行動が類似していると言える。

(12) の desire は want badly を含む文でパラフレーズできるが、(13) の

desire は want (強意語を伴わない) を含む文でパラフレーズできるという反論がでるかもしれない。

(12) Lorna desired Gustave with a fine, careless passion.

(13) I desire to be enrolled in the 004 section of Economics 101.

Borkin の言語では desire を want より形式ばった語として用いないが, desire は形式ばった語として, 特に手紙では, かなり一般的に用いられるように思われる。(13)におけるように非強意の意味で用いられるときは否定上昇変形も適用できる。(14a)はその派生において否定語上昇変形が適用されたであろう(非常に形式ばっているとしても)文と考え, それ故に(14b)と等価であると見做したい。

(14) a. My employer doesn't desire to offend a single customer.

b. My employer desires not to offend a single customer.

そして, (1b) が容認不可能なのは否定語上昇変形による (G. Lakoff (1970) の主張) のではなく, 少なくとも部分的には lift a finger が desire と形式性のレベルが異なるためであろう。というのは, Borkin には (1b), (1c) ともにおかしく思われるからである。

(1) b. *I don't desire that you lift a finger to help Bill.

c. *I desire that you don't lift a finger to help Bill.

desire (商業英語における用法でなく), crave, yearn, long は意味上より複雑で, このような動詞の意味表示は 'want+強意副詞' を含んでいると考えられるという点で, want とは異なる自然類 (natural class) を形成する。このような意味表示がどのように具現化されるかという問題は別として, want と desire などの動詞に対するこのような考え方は (2a), (2b) に関して前に指摘した事実とどのようにかかわってくるであろうか。

(2) a. Mary wants to bomb Hanoi.

b. Mary longs to bomb Hanoi.

この疑問に答えようとするとき Lawler の指摘した別の事実を考慮に入れなけ

ればならない。Lawler は (15a) はあいまいでない、すなわち、‘Mary tried to bomb Hanoi personally’ の解釈だけを持つものに対して、(15b) はあいまいであると指摘している。(15b) の自然な解釈は ‘Nixon, in his capacity as chief of the United States government, tried to bring about the bombing of Hanoi by representatives of that government, not by himself personally’ である。

(15) a. Mary tried to bomb Hanoi.

b. Nixon tried to bomb Hanoi.

Lawler は decide という動詞は try と類似した行動を示すということを指摘している。すなわち、Mary がある機関の長でなければ (16a) の bomb の削除された主語は Mary 自身でなければならないが、(16b) はあいまいである。

(16) a. Mary decided to bomb Hanoi.

b. Nixon decided to bomb Hanoi.

desire, yearn, long, crave などの動詞は want よりはむしろ try, decide と類似した行動を示す。すなわち、(17) はすべて (15b) と同様にあいまいであり、その解釈の一つは ‘Nixon wants very badly for representatives of the United States government, of which Nixon is president, to bomb Hanoi’ である。Mary を主語にする (18) の文はあいまいではない。

(17) a. Nixon yearns to bomb Hanoi.

b. Nixon desires to bomb Hanoi.

c. Nixon longs to bomb Hanoi.

d. Nixon craves to bomb Hanoi.

e. Nixon is itching to bomb Hanoi.

f. Nixon is dying to bomb Hanoi.

(18) a. Mary yearns to bomb Hanoi.

b. Mary desires to bomb Hanoi.

c. Mary longs to bomb Hanoi.

- d. Mary craves to bomb Hanoi.
- e. Mary is itching to bomb Hanoi.
- f. Mary is dying to bomb Hanoi.

Lawler の観察するように want だけが try, decide と異なる行動を示すけれども、強意語に修飾された want は意味構造に ‘want+強意語’ を含んでいる動詞や try, decide と類似した行動を示す。すなわち、(19)の文は(17)の文と同様、あいまいであるが、(20)の文は(18)の文と同様、あいまいではない。Mary がある機関の一人でなければ(20)の bomb の削除された主語は Mary 自身でなければならない。

- (19) a. Nixon badly wants to bomb Hanoi.
- b. Nixon desperately wants to bomb Hanoi.
- c. Nixon wants terribly to bomb Hanoi.
- d. Nixon wants to bomb Hanoi in the worst way.
- (20) a. Mary badly wants to bomb Hanoi.
- b. Mary desperately wants to bomb Hanoi.
- c. Mary wants terribly to bomb Hanoi.
- d. Mary wants to bomb Hanoi in the worst way.

yearn, be dying のような動詞と強意語を伴う want がなぜ try, decide のような動詞と行動を共にするのかをどのように説明すべきかわからない。しかしながら、G. Lakoff (1970), R. Lakoff (1969) によって提示された「否定語上昇変形は統語変形である」という議論を受け入れているので、否定語上昇変形とここで論じた動詞に関する事実を「語い項目は派生句構造の一部にとってかわる」という仮説に支持を与えるものと考え。たとえば, desire, yearn, long, crave という語い項目は強意副詞によって修飾された want のような述語を含む派生句構造にとってかわる。この論文で指摘した事実はこのような仮説を支持する。なんとすれば、統語的否定語上昇変形を適用するときに、desire, yearn, long, crave が句構造で単一の語い項目ではなくて、‘want+

副詞'を含む複合体であるなら、否定要素を‘want+副詞’という表面構造における複合体の前に移動させることを妨げる原理によって、否定語上昇変形は否定要素をこの複合体 (*i. e.* desire) の前に移動させることをしない。

以上が Ann Borkin の紹介である。want と desire に関する Ann Borkin の観察、すなわち、desire は意味上 ‘want+badly’ に分析されるという観察は彼女のように生成意味論の立場をとっても解釈意味論の立場をとっても説明されなければならない。しかしながら、want+badly を desire にかえるような語い挿入変形は全く ad hoc である。それ故に、この問題は意味解釈規則で処理する方が妥当であろう。今のところ、具体的解決案はない。ここで注目すべきことは「意味上の複合性」(semantic complexity) ということである。今まではこの観点からあまり動詞の分類などがなされてこなかった。換言すれば、意味的に類似した動詞は一つの類をなすということが無条件に受け入れられていたように思われる。この意味上の複合性は want, desire だけに限られない。

(21) The murdered (drowned, stabbed, electrocuted, decapitated, strangled, asphyxiated, etc.) man had thrown a bomb into the Police Station.

(22) *The killed man had thrown a bomb into the Police Station.
たとえば、Barkai (1972) によって指摘された事実も意味上の複合性に関連している。すなわち、murder は意味的に ‘kill in a manner which is intentional and premeditated’ と分析される。また、(22) の非文法的文も形容詞を修飾する副詞があると完全に文法的になる。

(23) The inadvertently (accidentally, tragically, etc.) killed man had thrown a bomb into the Police Station.

要するに、意味上の複合性という観点から動詞の分類が辞書においてなされるべきであるように思われる。

Borkin は (16a) はあいまいでないが (16b) はあいまいであるという観察を

している。

(16) a. Mary decided to bomb Hanoi.

b. Nixon decided to bomb Hanoi.

もしこの観察が言語学的にかかわってくるとすれば、同一性に基づく削除変形の定式化に多大の困難を与えることになるであろう。しかしながら、この観察は言語学的にかかわってこないように思われる。むしろ、(16a), (16b) ともに言語学的にはあいまいであり、(16a) では一方の解釈が現実の知識と照らし合わせて排除されると考えた方が妥当のように思われる。いずれにしても、この事実は同一性の問題に多くの困難を与えることになるであろう。

さらに、a red-haired girl は言えるが a haired girl は言えないということ、He has shown his theory to be true は言えるが、He has demonstrated his theory to be true は言えないこと (cf. He has shown/ demonstrated that his theory is true) も意味上の複合性にかかわっているが、それらの問題については稿を改めて論じたい。

REFERENCES

- Barkaï, M. 1972. "On the shiftability of past participles in English," *Linguistic inquiry* Vol. 3, No. 3, pp. 377-378.
- Borkin, A. 1972. "Two notes on *want* and *desire*," *Linguistic inquiry* Vol. 3, No. 3, pp. 378-385.
- Lakoff, G. 1970. "Pronominalization, negation and the analysis of adverbs," in R. Jacobs and P. Rosenbaum, eds., *Readings in English transformational grammar*, Ginn and Company, Waltham, Massachusetts.
- Lakoff, R. 1969. "A syntactic argument for negative transportation," in Binnick, et al., eds., *Papers from the fifth regional meeting of the Chicago linguistic society*, Department of Linguistics, University of Chicago, Illinois.
- Lawler, J. 1971. "A problem in participatory democracy," unpublished manuscript, University of Michigan.

(1982年1月31日受理)